

書評・紹介

佐々木教悟著

戒律と僧伽

牧田 諦 亮

佐々木教悟博士の生涯の研究を集成される『インド・東南アジア仏教研究』は、第一巻『戒律と僧伽』、第二巻『上座仏教』、

第三巻『インド仏教』の三冊から成るといふ。その第一巻が昭和六十年四月二十日、京都平楽寺書店から出版された。「教団の生命はどこにあるのか、教化の源泉はいずこにあるのか」ということが問いなおされつつある。これは時代の要請であるが、同時にまた教団に属する個々の人びとの当面する問題でもある。この問題に答えるためには、何よりも先ず積尊成道の原点に立ちかえって、仏弟子の集まりであった僧伽が、それぞれの時代とそれぞれの地域社会とにおいて、いかなる在り方で存在しえたか、そしていかなる衰微と発展とを繰り返していったかということが、学問的に可能なかぎり正確にあとづけられなくてはならないであろう。そしてこの場合、もっとも重要な事柄は、仏教の僧伽を支えていったものは、およそ何であったかということである。」との、本書冠頭の「はしがき」の一節は、その

ままに博士の研究生活に一貫した理念でもある。積尊入滅後の教団―僧伽を支えたものは、積尊所説の法と戒とであり、仏弟子たちの日常生活のよりどころとなった律制であるとする、この二面に深い関心を寄せつつインド及びインド文化圏における仏教の歴史的展開に対する研究を続けてきた博士の権威ある諸研究は、いわゆる南方仏教研究諸家の中でも、重厚な、とくに問題意識の確立した発表として、研究者の注目してきたものである。これは、大谷大学建学以来の、伝統的な研究態度、とくに赤沼智善・龍山章真・山口益諸教授の流れのもとに、脈々として絶えない真摯な研究方法が、佐々木教授によってさらに深められたものと言っても過言ではない。

本書では、第一章 律蔵の有する意義、第二章 僧伽を莊嚴するもの、第三章 上座部仏教の基盤、第四章 根本説一切有部の仏教、第五章 南海寄帰伝序文の内容、第六章 南海寄帰伝にしるされたる律制、附録1 南海寄帰伝科、2 テキストならびに研究文献 などの諸章から成る（A5 版本文三三九頁、索引二一頁）。その多くは、本『仏教学セミナー』に発表されたものに加筆修正し、さらにあらたに未発表の教節を加えて完璧を期したものであり、『印度学仏教学研究』、『日本仏教学会年報』などに掲載された教篇をふくむ。南海寄帰伝に関する二章は、昭和四十三年度東本願寺安居講本として出版されたものである。第四章以下は、南海寄帰伝に関する研究であり、頁数では本書の三分の二をこえる内容である。このことは、積尊所説の法と戒と、仏弟子たちの日常生活のよりどころとなった律

制が釈尊入滅後の僧伽を支えたものを今日に具体的に伝えた義浄三蔵の体験記録、そして佐々木博士自身の、今次大戦の敗戦前後三ヶ年に及ぶ仏教国タイにおいての宗教体験が、この生涯研究に鋭く活かされていることを、まざまざと知らされるのである。

昭和四十五年一月に、私は青蓮院蔵の古鈔本にもとづいて、『六朝古逸觀世音心願記の研究』を公刊したが、その自序で、『觀世音心願記』を中心とするこれらの論稿によって、ともすれば哲学的思索義解の科が仏教の中心であるかのごとくに誤解され、宗教の本義である実践の面が等閑視されがちな中国仏教史研究に、宗教としての仏教の歴史的研究に、一つの行き方のあることを理解していただければ幸いと思うものである。」と結んだ。このことについては、佐々木博士からも同感であるとの書翰を頂いた。おそらくは、博士の、仏弟子の集りであった僧伽が、それぞれの時代とそれぞれの地域社会において、いかなる在り方で存在しえたかという提言と軌を一にするものであろうか。その所為をもってかひなからわかないが、本書の書評を依頼されたときに、中国仏教においても、それぞれの所属する教団においても、教学（宗学）の研究はさかんであるが、仏教が、その宗派が、存在し得た背景としての時代と社会を併せ考えなければ、今日にまで存続し得た仏教・宗派の実態を知ることの不可能さを改めて認識したのである。さて、その観点に立てば、インド・東南アジアの仏教について何の知識も持ちあわさぬ私にとっては、本書の書評など、到底なし得ぬ

ことは明白のことである。たまたま第四章 根本説一切有部の仏教第2「三啓無常經」を読んだ感想について述べ、その責をふさぐこととしたい。

二

周知のように、義浄（六三五一—七一三）訳の無常經一卷（大正藏卷十七）は、開元釈教錄卷九、義浄の項に、

無常經一卷 亦名三啓經、大足元年（七〇二）九月二十三

日於東都大福先寺訳

と見える。則天武后の世に、洛陽において翻訳された無常經は、また南海寄歸内法伝卷二、(凶)尼衣喪制、卷四、(四)讚詠之礼などにも見え、義浄が旅行した当時のインドにおける根本説一切有部派の僧徒が日常行なっていた礼敬の作法にさいして誦誦されたといわれる。

義浄は、東夏（中国）での尼僧の衣がみな俗に流れて威儀にそむくことをいましめている。自己の見聞した南海の諸国の尼僧の少欲知足の生活を讚歎し、貧に居て質素を守ることを述べている。また死喪の際にも、いたずらな儀礼に捉われ、出家者でありながら在俗の者と同様なことをして孝子をてらうなどのこともいましめ、葬儀にさいして長髪するとか、儒教の礼法で喪礼に用いる哭杖を掛けたり、子として親の喪中には苦のむしろに寝るとか、仏教者としては好ましくない世俗の礼をすることを禁じ、僧侶の死者は火葬にすべく、能達の僧に「無常經」を誦せしめ、住処に還歸してから無常を念ずるなどのことを勧め

めており、われわれ仏教徒は釈父（釈迦）の聖教を棄てて、儒教の周公の俗礼を逐うて、数ヶ月泣き続け、三年の喪に服するなどする必要があろうかときめつける。しかも中国における前例として、宝山寺靈裕（五一八—一六〇五）が十五歳のとき、父の死にさいして哀を挙げず喪服を着ず、しかも先亡を追念するために十八歳で福業を修した（出家した）ことを記し、長安・洛陽の諸師でこれにならうものが多かったという。

さらに南海寄帰内法伝巻四（讚詠之礼）においては、中国では古來仏を礼拝し、經の題名を称えることは知っているが、徳を讃えて称揚することを知らないとして、自身が体験した、南方での仏塔に対する礼拝や、日常の僧徒の礼敬について記している。毎日申の時（午後四時）後か、いわゆる「たそがれ時」に僧院の門を出て、塔を右繞三匝し、香華をつぶさに供えて、大衆一同ことごとく蹲踞する。諷誦に巧みな者が哀雅の声でしかもすみずみまでしみわたるように「大師法」を十頌または二十頌唱え、終つて順序よくまた寺中に入り、常集の処にいたる。大衆が坐しおわると、一人の吟諷にたくみな僧（經師）が師子座に昇つて、みじかい經を説誦する。この經が、馬鳴が諸經の意を取つて集めて造つたという三啓經である。佐々木博士は、大正大藏經第八十五卷に収められているスタイン將來の漢文文献の中に經の殘簡があり、その殘簡の首部は欠けているが、末尾に『仏説無常三啓經』一卷と記され、

初後讚歎、乃是尊者馬鳴取經意而集造、中是正經金口所說、事有三開、故云三啓也、

と註記されていることを挙げ、義浄は、節段を三たび開き、初めはほぼ十頌（經の意をとつて三尊—三宝を讚歎し、つぎに仏の親説なる正經、そのあとに十余頌—發願廻向の意をあらわしたもの）がつけられる旨を述べるのと一致しているとし、三啓が三啓無常經とも称されたことは『雜事』卷十八及び『撰律』卷七に見えており、さきの「尼衣喪制」の下では『無常經』の名であげられていると、三啓經の緣由をあきらかにしておられる。

三

義浄訳の無常經一卷は、上記開元録に記録され、入藏録に見えてから、「真經」として処遇され、宋版大藏經以後の漢訳大藏經にも入藏されて、今日にいたつている。中国仏教では、葬場で説誦される經典であるという点で注目されると、泉芳璟先生は仏書解説大辞典で解説しておられる。義浄訳の原本と対校できない以上、漢訳現行の無常經について言えば、大正大藏經が第十七卷に収めながら、第八十五卷疑似部に敦煌本の仏説無常三啓經を再録したことは、首欠の十一行を除けば以下は同文であることは明瞭なことであり、拙速の感なきにしもあらずである。博士の人柄から、直接には言及しておられないが、大正大藏經編集についての一つの指摘ではある。

趙宋第三代真宗皇帝の天禧三年（一〇一九）秋に編集したことを記す錢唐月輪山の道誠の『釈氏要覽』三卷は、贊寧の『大宋僧史略』とともに、「仏教の僧伽を支えていたものは、凡そ

何であったかということ(本書はしがき)」について、中国仏教研究上の重要な著作といえよう。天禧三年八月には天下に大赦し、かつ僧二十三万百二十七人、尼一万五千六百四十三人、道士ら七千余人に、祠部の文牒(度牒)を与えた(普度)というような仏教全盛期でもあった。この釈氏要覽卷下、送葬の項には、

毘奈耶云、送葬苾芻、可令能者誦無常經并伽他、為其呪願、という。一度に二十四万五千人もの出家者を出した時代の要求にこたえて道誠が、経文を読んでもその真義を理解できぬもののために、また新出家者の須知すべきことなどを編集したものであり、当時の仏教界の生きる姿が、これらの文々を通じて窺い得るのである。道誠の見た無常経は、今日の流通本に見られるように、「臨終方決」の付せられたものであろう。僧尼が、まさに命終せんとして身心に苦痛有る人を見れば、慈心をもって拔濟饒益しなければならぬとして、香湯もて澡浴して清淨ならしめ、新浄衣を着せ安祥に坐せしめて正念思惟させる、自力で坐れないものには余人がこれを扶けて坐せしめ、坐れないものは右脇を地に著けて至心に合掌して顔を西方に向かす……にはじまって、まます糞香泥をもつて地に塗るなどのインド様の記載もあるが、この「臨終方決」の文章は唐宋以後の浄土教隆盛期に増添されたものと思われる。敦煌本の無常経にはこの「臨終方決」は付されていない。これは、あきらかに僧侶たちに、観無量寿経を中心として、西方浄土往生を願い、期するものである。毘奈耶雜事十八の説や、義浄訳の無常経を受けて、

亡者のために無常経を読むことを説き、この経を聞くものは各々自ら己身の無常を観ぜよという。また、命終の後で在家の亡者の新好の衣服、隨身受用の物は三分して、仏陀・達磨・僧伽の三宝に施せば、亡者の業障うたた尽きて勝功德を獲るであろうという。出家者の亡者の衣物などは、律教にしたがって処分することをいう。以上からみると、大正藏経本無常経に付せられた「臨終方決」は、印刷大藏経本にのみあること、一見無常経にあうように、苾芻苾芻尼、鄔波斯迦、鄔波斯迦などの文字を用いて古体をよそおいながら、観無量寿経を中心とする西方無量寿国への願往生をもつばらにするのであり、宋代浄土教の隆盛を示す一つの証佐となるものである。

佐々木博士の著書のことを多く記さず、無常経に力を注いだのは、実は義浄訳出後の無常経は、当時の中国仏教教団(もとより日本の仏教各宗派のような組織力をもつたものではない)の僧侶信者たちの間でよく読まれ、とくに送葬のさいにこの経に、さらに「臨終方決」が増添されて、観無量寿経を中心とする浄土教の側で大きく作用し、それは当時の中国の教団が、インドでの体験記録を、さらに中国的に発展させるための動きをなしたことを知るためである。義浄のインドでの所見を、臨終方決を付することによって、当時の教団(僧伽)が布教の上でどのようにはたらいたかを、佐々木博士の所見を通して知られるからである。

無常経の敦煌写本については、王重民編の『敦煌遺書総目索引』では、北京図書館に十五点、スタイン本に十八点、ペリオ

本に一点が挙げてある。ソ連にも四点あることがメンシコフの目録によって知られる。しかしその多くが大正蔵経本(卷十七)の無常経と一致するが、中にはそうでないものもある。ペリオ本(二三〇五)に「無常経講経文」ありとして、王重民ら編集の『敦煌變文集』にその全文を掲げているが、内容を見ると、義浄訳の無常経の講経文ではないことが知られ、この題名は疑問が存するし、メンシコフの目録を見ても、確実に義浄訳の無常経と一致すると思われるものはないようである。慎重な原本についての調査がまたれる。

なお梁の僧旻、宝唱ら共編の『経律異相』卷五に、昔、波羅

門四人あり、皆神通を得たり……、是等四人それぞれ甘美の石蜜四瓶を積尊に供養し、法を聞く……心開け、意解けて阿那含道を得、ついに積尊の弟子となり、ついで仏前において羅漢道を得と説くところがあり、このことは「無常経に出づ」とする。義浄出世より二百二十余年も以前の編集である『経律異相』に「無常経」の名を見ることは、当然、義浄訳の無常経とは各別のものであることは自明のことである。またペリオ本(二〇九一)に「無常経疏 白崖寺僧正演述」があり、これは残闕ながら、義浄訳無常経の注疏である。

(昭和六〇年四月二〇日 平楽寺書店 A5判三七二頁 八、五〇〇円)